

## アーカイブの可能性

まちづくりのためのタイムマシン  
「過去の都市空間の再現」の現在と未来

中島直人(東京大学) + 真鍋陸太郎(東京大学) + 饗庭 伸(首都大学東京) + 都市空間の定点観測研究会

協力/布施孝志(国土技術政策総合研究所)

連載の第2回となる今回は「都市空間の再現」と題して、IT技術の進展を受けて可能になった、都市空間の再現技術の最先端を概観する。

## 過去の再現

## ◆まちづくりの現場で「過去」が持つ力

瀬戸内海の歴史的港湾都市・鞆の浦で、イベントを開催した時のことである。港に面した蔵を借りて、即席バーを設置した。夕暮れ時になって、そこに年配者の二人組がやってきた。「君らは埋立架橋事業に反対しているんだろ。地元の声もろくに知らないくせに。一体何の権利があつてよそ者が入ってくるんだ」等々どやししながら、学生たちに議論をおっかけてきた。缶ビール片手の話は一方的で、学生との対話は成立しない。説教は延々と続いた。

しばらくして、日も暮れてきたので、昭和40年代くらいのまちの古写真の映像を、蔵の外の壁面をスクリーンにして流してみることにした。すると、その映像に気付いた二人は、説教を中断し映像の方に寄つてきた。通りすがりのおばあさんや若者も集まってきて、映像を囲んで、「あ、あれは誰誰のお母さん。若いな」「あ、これはどの通りだ?」「お店が並んでいて賑わいがあったよね」等々、談義が始まった。二人も、学生たちの「ここはこんな風だったんですね」などの素朴な感想に対して、「そうだよ。で、あそこにはあれがあつてね」などと応じてくれるよう

になり、会話が成立した。そして、一通り、いや、2、3回繰り返して映像を見てから、二人はほろ酔い加減で気持ち良さそうに帰っていった。こうした場面は、まちづくりの現場でよく出会うものだと思う。まちの「過去」、即ち「歴史」や「記憶」には特別な力がある。それは、地域の共有財産であり、まちづくり談義の開かれたプラットフォームである。昔懐かしさの想起に終わらずに、現在のまち、その日常風景の対象化を促す力があるというこのようだ。

## ◆過去の都市空間を記録したもの

一般に過去の都市空間の様相を記録した媒体として、各種の地図がある。中世、近世の絵図、明治期以降の各種の地形図、地籍図、さらには商土地図や火災保険特殊地図、住宅地図などで、まちの成立を理解す

るのに役に立つ。地図1枚からでも、知識と想像力を働かせることで、当時の地域の姿を推測することができ。しかし、限界がある。例えば建物や街並みの表情までは分からないし、何よりもそこを人々がどのように「生きていたのか」が分からない。文学、紀行文、日記などの文字資料がヒントを与えてくれるかも知れないが、やはり限界がある。どうしてもデジタルな資料が欠かせない。鞆の浦で上映したような古写真は、一枚一枚が過去の都市空間についての情報の宝庫である。このような古写真を組織的に集める取り組みが、まちづくり活動の一環として各地で行われている。例えば、せんだいメディアテークは、2004年から戦災復興記念館が収集していた写真資料のデジタル化や、一般市民からの写真募集イベント等を実施し、

